男女共同参画社会
～女性の視点からの想い～

浅野 邦子 氏

株式会社箔一 取締役会長
一般社団法人金澤レディース経政会理事長
〈2016年から4年間〉 経団連（一般社団法人日本経済団体連合会）副議長
〈2022年8月〉 石川県成長戦略会議委員 現在

聞き手：赤澤 純代
日本抗加齢医学会理事 男女参画委員会委員長 編集委員会委員
金沢医科大学総合内科学 臨床教授
金沢医科大学病院 集学的医療部女性総合医療センター長

男女共同参画社会とはどんな社会でしょう？ 男女が社会の対等な構成員として、自らの意思によって職場（仕事）、家庭、地域社会など、多様な活動に参画できる機会が確保され、自らの希望に沿った形で夢や希望を実現でき、一人ひとりが豊かな人生を送るという目標にむかって男女ともに責任を担う社会のことだと思います。
2022年7月に公表された「Global Gender Gap Report 2022」では、日本のジェンダーギャップ指数は、146ヵ国中116位と主要先進国では最下位でした。しかし、そのような日本社会で活躍している女性が多くいるのも、また事実です。

はじめに

赤澤理事：今回は、金沢箔で起業され事業を拡大し、今では地元の一大産業にまで成長させ、女性活躍のロールモデルとして女性の社会参画の促進に貢献した株式会社箔一取締役会長 浅野邦子氏にインタビューさせていただきます。

浅野会長は、石川県男女共同参画推進功労者として表彰され、2016年日本経済団体連合会（経団連）の副議長に女性経営者として初めて就任されました。地方、中小企業、女性、創業者の4点に立って社会に提言を続けています。本日は、ウェルビーイングに変える力、困難をその原動力に転換するポイントなど、やり抜くパワーやあふれる思いの詰まったお話を聞かせていただきます。

女性として起業
～「女性」の視点からの想い～

浅野会長：私は、「女っていいよね」という言葉を使われるのが嫌いです。「女だから」、「女には無理」など、勝手にレッテルを貼られているのではないかと思ってしまいます。男性には力があるように、女性には女性特有のきめ細やかさや和み、優しさなど、女性ならではの良い部分がたくさんあります。男性女性に対する尊重・尊敬を互いに認め、その女性の一番の利点をどうやって活かしていくかが、男女共同参画につながっていくと考えます。

私は、昭和50年（1975年）に「箔一」を創業し、金沢箔を下請け産業から脱皮させ金沢箔の用途を多様化することにより「金沢箔のブランド」を構築しました。ここまでくることができたのは、誰もしたことがないことや前例のないことをやる、また自分自身でマニュアルを作ってベンチマークを築いていかなければいけない、という強い信念があったからです。仕事の規模がまだ小さい頃、興味を示してくれる人は少なかったのですが、皆さんが気付いたときには、トリプルAを得るほどの財務体質の会社になっていました。本当に苦労しましたが、苦労を乗り越えることで自信がつき、気が付いたら一気にビジネス展開ができました。この発展が大きなブレイクスルーとなって、新たな流れに乗ったのだと思います。

私の場合、今に見ておれ、「負けたくない」という強い動機がありましたから、色々な悔しさをバネにしました。金箔の業界を変えて、やり遂げなければいけないという、使命を帯びていると自分に言い聞かせました。そのことは自分が壊れそうになったとき、自分を励ます力になっています。

男女共同参画について思うこと

昭和38年、私が高校を卒業した頃の日本は、女性は早く結婚してより多くの子どもを産むことが望まれていた時代でした。私も大学の進学を断念し、20才で結婚致しました。父の教えは、「女性だから」ということは一切なく、「政治を批判するなら政治家になれ」、「わからないことに口を出すな。口を出すのであれば、自分がその業界に入ってすべてを知り尽くしてから、しっかりとした意見を出せ」ということでした。

男女参画とか共同参画については、国も県も市も現在も何年も同じことをいっています。進歩しない理由の一つとして、女性自身にも甘えがあるようにも思います。たとえば、50％は前向きにやりたいなと思う気持ちと、30％は自分を保護する気持ち、自分自身を守るために真綿で自分を包んでいるような感覚でしょうか。その真綿は、自分で意識して取る必要があります。反骨精神というか、夢を叶えるために情熱を燃やして、自分で道を拓くためにも、勇気をもって積極的に取り組むことが必要です。また、女性は、女性の会など何かとネーミングに「女性」をつけたがります。そういう部分でも女性蔑視につながっていると思います。

私は、いつか「女性省」を作りたいという夢をもっています。将来、「子ども家庭庁」が創設されることになっていますが、「子ども家庭庁」と言うとまた「女性は子育てと家事」などという言葉にとられるのではないかと懸念しております。そのため「女性省」が適しているように思います。女性には、いろんな世界を知ってほしいですし、さまざまなことを知ったなかで、自分が何を学んでいくかを決めて欲しいです。学ぼうとする能力やその能力を自分で磨いていこうというのは、これはもう男性も女性も老いも若きもないです。

経団連は最高のステージ

私が役員として経団連に入った平成８年（1996年）、女性は私で2人目でした。「キャリアもなく、地方で、女性で、中小企業で」と、今から思うと何もわからないところでした。役員会議では、皆さんが横文字でお話されますと「意味もわからない」、「わざとかもしれない」と、入社当初はとても不安でした。

私は「これらを必ずクリアしなければいけない。任命してくださった会長、推薦してくださった方、賛成してくださった方々に迷惑をかけてはいけない」と思い、まずわからないことは必ず質問しようと心に誓いました。私は、人が恥ずかしいと思うことは、昔から恥ずかしいと感じないタイプでした。学生時代から、先生にも積極的に質問をしていたので、質問することに抵抗はありません。私自身にとって学ぶということはそういうことでした。

一方で、経団連は大企業で構成されておりますが、右も左もわからない私に良くしてくださった方が沢山いました。緊張している私の周りは賑やかで、そこには笑いもありました。それは女性が入ったことによって、「和む」ということだったと思います。入社して1年経った頃から、声をかけてくれる方々がさらに多くなり、親切にご指導いただいた大企業の会長・社長のような方々と距離を置かないように心掛けました。ありのまま接すること、その距離を縮めることが、男女共同参画のうちの一つになると思ったからです。

経団連の提案の中で中小企業と大企業と技術開発のマッチング事業をしたいと考えたことがありました。当初は反対意見もありましたが、今では経団連の一つの事業になっています。アイデアや技術という能力があっても、資金の少ない中小企業にとって大企業が資金援助をしてくれることは、商品や技術を世の中に出すことができることにもつながります。中小企業は、実の声を出します。そのことによって、大企業とのマッチングコラボが産まれ、また違う形になって世の中にいい商品を産み出し企業を大きくしていけたらいいのです。

私が、前向きな姿勢で学び、やり遂げることができたことで、「女性でも地方企業でも関係ない」ということを示すことができました。経団連の参加は、私にとって本当に人生の大きなチャンスになり、とても感謝しています。

医療関係者への願い

今回のインタビューをお受けしたのには、医学会の学会誌ということで、多くの医師の方に私の思いを告げることができる場になると思ったからです。

年を重ねていく中で、病気にもなりますが、何が人を助ける支えになるかというと薬じゃなくて、医師の言葉だと思うのです。患者さんを勇気づける言葉。言葉っていうのは、人を100倍勇気付けるっていうことに気づいてほしいと思います。何故なら私自身が現在余命宣告をされたすい臓がんと格闘している状態だからです。

今の医療制度では、治療法は決まっているのだと思いますし、それしか説明しない先生も多いように思います。患者さんのことよりも自分を守ることが全面に出ているように見えることがあります。

マニュアル通りじゃなく、患者さんにとって、自分に寄り添ってくれる言葉や、病気に向かえるよう勇気づけをしてほしいのです。

ルールに沿った治療で患者が助かる見込みがない治療で苦しむため生きるしかないことがあっていいのかな。高齢者に高い医療費を使うばかりではなく、赤ちゃんや子どもに医療費を使っていかないと少子化をくい止めることはできません。これから医療費高騰でそれが、高齢になってから使われるのではなくて、若い元気なときに寿命を延ばしてあげることをやっていかないといけませんね。健康あっての長寿だと思います。最後は人生をそれなりに楽しみながら、PPK（ピンピンコロリ）になったら、一番ハッピーじゃないですか。

海外では死生観という学問があり、自分の死を人生の完成としていく過程を学びます。死を前にしていかされている人が命の選択ができないことには日本の法律の壁があります。私の元気な意識のあるうちに自分の命を自分が保証するから、自分でどうするか選べるような、自己責任が取れる法律もこれからは必要です。

次世代の子供たちにとって良い仕組みができることが大切です。日本の未来が明るいことを祈っています。

株式会社箔一　（https://www.hakuichi.co.jp/）
創　　業：1975年１月
会社設立：1977年９月
事業内容：金沢箔の製造、販売／金沢箔製品／建材装飾の企画、デザイン、施工／観光施設の運営
金沢箔を高級品ではなく、日常品に使ってもらいたい。金沢発のブランドとして、金沢箔を広め世界に伝えたく、新しい分野へチャレンジしています。